

学籍番号: CD151010

友人との集団意思決定への参加意図の形成メカニズム

—旅行の意思決定を事例として—

Decision Making with Friends: Exploration of Intention to Participate in Group Decision Making

(要 旨)

大学院商学研究科
博士後期課程 経営・マーケティング専攻
豊田紗綾

友人との集団意思決定への参加意図の形成メカニズム

—旅行の意思決定を事例として—

(要旨)

豊田 紗綾

目的

家族や恋人や友人と、レストランや居酒屋で食事をしたり、旅行に出掛けたり、スポーツなどのアクティビティを楽しんだりすることは、ほとんどの人が日常的に経験しているのではないだろうか。このように誰かと一緒に同じ商品やサービスを選択して消費するという行為は、共同消費 (joint consumption) と呼ばれる。このような共同消費は、例えばサークル全体で使用する備品を購入する、といったような商品の購買でも見られる現象ではあるが、多くは、旅行やレストランといったサービスの消費で見られる現象である。

本論文は、友人との旅行の意思決定を事例として、友人同士で構成される集団での意思決定プロセスの解明を主たる目的とするものである。特に、組織・家族の購買意思決定研究が主に問いとしてきた、「集団の意思決定に対して最も影響力を持つ者」に焦点を合わせる。友人との意思決定に関する数少ない先行研究によれば、友人集団の意思決定では、集団意思決定プロセスに積極的に参加する「まとめ役 (Organizer)」と、旅行に参加するだけで満足し、意思決定プロセスへはほとんど関わることがない「参加者 (Participant)」に二分される、意思決定の代表性 (Delegation) がしばしば起こるといふ。意思決定の代表性という現象の背後にあるのは、友人集団内のメンバー間で「集団意思決定へ参加するか否か」に差が発生するということである。まとめ役は「意思決定に積極的に参加する」という意思決定を行い、情報探索や情報の吟味、最終決定といった行動をしているのに対し、「参加者」は友人との意思決定に「積極的には参加しない」意思決定をしているのである。すなわち、友人同士の意思決定では、友人と「何」を決めるかという問題以前に、集団の意思決定に参加するかどうかという意思決定がなされているのである。

本論文は、この代表性の背後にある「意思決定プロセスへの参加」に対する意思決定のメカニズムを明らかにすることを目的とする。すなわち、集団意思決定へ参加する個人が、どのように意思決定への参加を促されるのかを明らかにするということである。具体的なりサーチクエスションは以下の通りである。

- ・ 友人との旅行の集団意思決定への参加を促す要因は何か？
- ・ 集団意思決定への参加に対する個人の動機づけにはどのような傾向があるのか？
- ・ 集団意思決定への参加に対する動機づけの違いによって、集団意思決定への参加が生起する「要因」の影響に差はあるのか？
- ・ 個人の集団意思決定への参加の動機づけの違いとデモグラフィクスやパーソナリティ、様々な友人集団での意思決定への参加の頻度はどのように関係しているのか？

本論文の構成

本論文は、4部11章構成である。第Ⅰ部のリサーチクエスションの設定（第1章～第4章）では、先行研究の検討を通じて、本論文の方法論的立場と研究アプローチ、リサーチクエスションを明確にする。第Ⅱ部の定性データの解釈（第5章～第7章）においては、質的なデータの分析によって、友人間での旅行の集団意思決定の特徴と、集団意思決定への参加を促進する要因、そして個人の動機づけ傾向やパーソナリティといった特徴を抽出する。そして第Ⅲ部の定量データによる検証（第8章～第10章）では、第Ⅱ部で導きだした仮説を定量調査によって検証する。第Ⅳ部まとめ（11章）では、本論文の総括を行う。具体的には、学術的貢献および実務的貢献を述べた後、本論文の限界を確認し、今後の研究を進めていく上での示唆を述べる。

詳細な項目は以下の通りである。

第Ⅰ部 リサーチクエスションの設定

第1章 問題の所在

- 第1節 問いの背景
- 第2節 事例選択
- 第3節 論文の構成

第2章 集団の意思決定に関する研究

- 第1節 集団視点のアプローチ
- 第2節 個人視点のアプローチ
- 第3節 まとめ

第3章 友人集団の意思決定

- 第1節 友人集団の意思決定研究
- 第2節 友人集団の意思決定研究の課題

第4章 リサーチクエスションと研究手法

- 第1節 リサーチクエスションの設定
- 第2節 混合研究法：質的データと量的データ
- 第3節 研究全体の設計

第Ⅱ部 定性データの解釈

第5章 質的研究と分析手法

- 第1節 調査の概要
- 第2節 質的データの分析方法：質的コーディングと計量テキスト分析

第6章 友人集団内での役割分担

- 第1節 友人集団の意思決定における意思決定役割
- 第2節 解釈

第3節 役割分担パターンの抽出

第4節 まとめ

第7章 意思決定への参加意図の形成要因

第1節 分析方法

第2節 集団意思決定への参加の促進要因

第3節 意思決定への参加の動機づけ：自律的動機づけと他律的動機づけ

第4節 パーソナリティの影響

第5節 まとめ

第Ⅲ部 定量データによる検証

第8章 集団意思決定への参加意図の形成モデルの検証

第1節 目的

第2節 仮説

第3節 調査概要

第4節 調査設計

第5節 結果

第6節 まとめと考察

第9章 RAI指標による多母集団同時分析

第1節 はじめに

第2節 動機づけ研究：有機的統合理論とRAI指標

第3節 友人との旅行における意思決定参加への動機づけ尺度の構成

第4節 RAIの違いによる集団意思決定への参加意図形成モデルの多母集団同時分析

第5節 まとめと考察

第10章 RAI指標とデモグラフィクス・パーソナリティ・計画行動頻度の関係

第1節 はじめに

第2節 先行研究と仮説

第3節 調査設計

第4節 結果

第5節 まとめ

第Ⅳ部 まとめ

第11章 結論

第1節 総括

第2節 学術的貢献

第3節 実務的貢献

第4節 本論文の限界と今後の課題

APPENDIX インタビュー対象者の概要と旅行ケース

参考文献

第I部 リサーチクエスションの設定

第I部は、第1章～第4章で構成される。

第1章では、本論文の問いの背景と「旅行の意思決定」を事例として選択した理由、そして論文の構成について述べた。

続く第2章では、消費者行動研究、観光研究分野において研究が進んでいる「家族」と「組織」の2つの集団における集団意思決定の「主体」に関する先行研究を、2つのアプローチに分けてレビューを行った。その2つとは、〈集団視点のアプローチ〉と〈個人視点のアプローチ〉である。〈集団視点でのアプローチ〉は、意思決定に関わる「意思決定単位 (Decision making Unit)」の構造や関与度、そして集団の中で影響力を持つ主体、主体間の影響力を左右する「要因」を明らかにすることを目的とするアプローチであった。一方の〈個人視点のアプローチ〉は、意思決定に関わる「個人」に焦点を当て、集団内の「個人」が意思決定に関わっていく要因や動機づけについて議論するアプローチであった。

そして第3章では、友人との意思決定についての数少ない研究についてレビューを行い、先行研究が全て〈集団視点のアプローチ〉を採用していることを確認した。そして、友人集団の特性から派生する〈集団視点のアプローチ〉を採用する場合の問題点について3つ指摘した。その3つとは、友人集団のもつ意思決定単位内の比較基盤のなさ、意思決定単位自体の不安定さ、個人の属する友人集団の多様性の3つである。そして、本研究はこの問題を克服するための方法として、〈個人視点のアプローチ〉を採用することを述べた。

第I部の最終章である第4章では、改めて本論文のリサーチクエスションを述べたあと、本論文が採用する研究手法である混合研究法について説明し、研究全体の設計について説明した。

第II部 定性データの解釈

第II部となる5～7章では、定性的なデータの分析を行った。第5章では、収集した定性データの収集方法と質的なデータの分析方法について説明した。収集した定性データは、友人との旅行の頻度が高い大学生を対象に収集したインタビューデータと自由回答記述データの2種類である。定性データには2つの分析方法が採用された。1つは、質的コーディングである。質的コーディングは、データに基づいたイーミックコードと、概念や理論に基づいたエティックコードを組み合わせ、高次の抽象的な概念としてカテゴリ化することで理論化を目指す手法である。もう1つは、質的なデータを数値として計量化し、定量的に分析する計量テキスト分析である。

続く第6章では、友人との集団意思決定の際にどのような意思決定役割が見られ、それらの役割がどのように集団内で分担されているのかを質的データに基づいて解釈した。インタビューデータと自由回答記述データからは、〈発案者〉〈ゲートキーパー〉〈影響者〉〈決定者〉〈購入者〉の5つの役割が抽出された。そして、これらの意思決定役割がそれぞれのインフォーマントが参加した旅行ケースにおいて、集団内のどの程度の人数によって担われているかを評価し、旅行ケースにおける役割分担パターンを階層的クラスター分析によって抽出した。抽出されたパターンは、大きく3つであった。その3つとは、1

人のまとめ役による意思決定、一部メンバー中心の意思決定、共同意思決定である。そして、ほとんどの意思決定役割を集団内の 1 人もしくは少人数で多く負担する「まとめ役」による意思決定が比較的によく行われていることを確認し、意思決定の代表性がみられることを確認した。

第 7 章では、まず本論文の主となる問いである、集団意思決定への参加を促進する要因を抽出した。抽出されたのは、＜態度＞＜有能さ（効力感）＞＜時間の余裕＞＜他者からの期待（主観的規範）＞＜他者への期待＞の 5 つの要因である。これらの要因は、計画的行動理論と合致する部分が多くあることから、計画的行動理論との関連についても議論した。さらに質的なデータの解釈から、意思決定への参加理由についての傾向として、自ら主体的に意思決定に関わっていく「内的動機づけ」と、他のメンバーが意思決定に参加しないから仕方なく、といった他律的に動機づけられる「外的動機づけ」の 2 つの動機づけ傾向が確認された。最後に、「パーソナリティ特性」も集団意思決定に参加する人物を特徴づける特性の 1 つとして質的データに現れていることを確認した。

第Ⅲ部 定量データによる検証

第Ⅲ部となる 8～10 章では第Ⅱ部の定性的なデータに基づく仮説の検証を行った。まず、第 8 章では、集団意思決定プロセスへの参加意図を説明する「集団意思決定への参加意図の形成モデル」を共分散構造分析にかけ、モデルに説明力があるのかを検証した。検証の結果、時間の余裕以外の要因—態度、効力感、主観的規範、他者への期待—は、全て行動意図に対して直接的に正の影響があることが明らかになった。時間の余裕は、直接的な影響は有意にはならなかった。

続く 9 章では、個人の集団意思決定への参加に対する動機づけの違いを検証した。自己決定性の違いを指標化する RAI 尺度を作成し、その指標を元にサンプルを＜RAI 低群＞＜RAI 中群＞＜RAI 高群＞の 3 群に分けて「集団意思決定への参加意図の形成モデル」の多母集団同時分析を行った。モデルの構成概念が集団意思決定への参加意図に与える影響を比較したところ、それぞれの群で、参加意図に影響を与える変数が異なることが明らかになった。具体的には、RAI 中群と RAI 高群の間で、効力感、主観的規範、他者への期待からの行動意図のパスに有意な差があり、RAI 中群では、RAI 高群に比べて自分が集団の意思決定の能力がある、効率的、効果的に進められる、といった効力感が意思決定の参加意図により強く影響していた。一方で RAI 高群では主観的規範や他者からの期待といった要素が RAI 中群に比べて強く影響することが分かった。また、RAI 低群と RAI 高群は、行動意図に対する変数のパス係数の差は有意とはならなかったものの、他者への期待と効力感や主観的規範との間の負の相関関係の差が有意となり、RAI 低群で負の相関が強かった。よって、RAI 低群も RAI 高群も各変数が直接行動意図に影響を与える強さには差がないものの、RAI 低群は集団内の他の友人存在に大きく影響される傾向にあるという点で RAI 高群とは異なると結論づけられた。

第Ⅲ部の最終章である 10 章では、RAI 低群、中群、高群間のデモグラフィクス・パーソナリティ・集団意思決定への参加頻度の比較を行った。その結果、RAI 低群は、男性が多く、内向的で心配性で、保守的な傾向にあるのに対して、RAI 中群、高群になると女性が多く、外向的で協調的・勤勉で、新しい経験に対してオープンである傾向にある、という結果になった。また、RAI 低群に比べて高群のほうが、友人との旅行の集団意思決定に参加する頻度が高いという結果になった。

第IV部 まとめ

第IV部では、本論文の総括を行い、学術的な貢献と実務的な貢献について議論したあと、本研究の限界と今後の課題について述べた。

友人との旅行の集団意思決定においては、ある一部のメンバーが他のメンバーの代理として意思決定プロセスを遂行していく代表性（delegation）という現象が良く見られる。これは、「まとめ役」あるいは「社会的代理消費者」という意思決定に深く参与するメンバーによる意思決定であり、彼らは、意思決定を遂行できる可能性のあるメンバーが集団内に複数存在する中でも、自らを動機づけ、集団意思決定に参加する。この集団の意思決定に参加するか否かという参加意図を形成する要因には、4つの直接的な要因があることが示唆された。その4つとは、意思決定への参加に対する好意的な態度、自らの能力についての認知である効力感、自らが意思決定に参加するかを期待されているかどうかについての認知である主観的規範、他者がどの程度意思決定に参加してくれるかという他者への期待である。そして、意思決定への参加に時間を割くことができるかどうかを表す時間の余裕は、直接的な影響は有意とならなかったものの、態度や効力感、主観的規範と正の相関関係にあることから、参加意図に対して間接的な影響があることが示唆された。

しかし、これらのどの要因が強く働くかは、それぞれのメンバーが集団意思決定参加に対して内的（自律的）もしくは外的（他律的）に動機づけられるかによって異なっていた。外発的な要因に動機づけられる集団は、内的に動機づけられる集団と比較して、より効率的・効果的に意思決定を遂行できそうな有能なメンバーの存在に自らの主観的規範や有能さの認知が左右される傾向にあった。また、外発的に動機づけられる集団は比較的男性が多く、神経質で心配性で、保守的である傾向にある一方、内的に動機づけられる集団には女性が多く、外向的で協調的・勤勉で新しい経験に対してオープンである傾向にあり、友人との旅行の意思決定への参加頻度も高い傾向にあった。

本論文の学術的貢献は大きく分けて4つある。まず1つ目は、集団における消費の意思決定の分野でほとんど議論の対象とされてこなかった友人集団に焦点を合わせたことである。2つ目は、既存研究において研究対象とされてきた集団とは異質な集団を研究対象とすることで、既存の集団意思決定研究では注視されてこなかった研究課題を示した点にある。3つ目は、先行研究で示唆されていた「まとめ役」が集団意思決定に参加するという行動を生起するに至る心理的メカニズムを明らかにした点にある。4つ目は、本論文が「計画的行動理論」を、集団行動における「個人」の行動予測に応用した点にある。

本論文の実務的な貢献は、2つある。まず1つ目は、友人との集団意思決定で「何」を選択するか、という問題に対して影響力を持つ可能性の高い「まとめ役」および「社会的代理消費者」がどのような心理的要因によって意思決定に関わっているのかを明らかにした点にある。2つ目は、動機づけの違いによって心理的メカニズムが異なることを明らかにするにとどまらず、動機づけの違いによってデモグラフィクスやパーソナリティ特性に違いがあるのかを検証することで、集団の意思決定に内的もしくは外的に動機づけられる者がどのような人物であるのかを明らかにした点にある。

本論文は、先行研究ではあまり議論が進められてこなかった、友人集団での意思決定場面に焦点をあわせ、集団内の個人がどのような要因で意思決定参加を決定するのか、そして個人の動機づけの傾向とデモグラフィクスやパーソナリティといった要因がどのように関係しているのかを明らかにした点で、学術的にも実務的にも意義のある論文である。しかし、今後の研究をさらに発展させていく上での本論文の課題は大きく3つ挙げられた。

まず1つは、「集団意思決定への参加意図の形成モデル」の検証をする上で、場面想定法を採用し、旅行の行先（アメリカ旅行）や同行者の人数（3名）を限定する形で検証した点である。

2つめは、本論文の取り扱う「意思決定への参加」という問題設定によって、友人集団内で最も影響力があるのは誰なのかという1つの集団内の影響力関係については議論の対象としなかったことである。

最後に、本論文は、個人の意思決定に対する動機づけの傾向を「自己決定性」の違いとして解釈してきたけれども、この動機づけの違いによって、意思決定の際の「行動」にどのような違いがあるのかどうかについては触れられなかった。

これらの研究上の限界は、本論文の学術的、実務的価値を損なうものではなく、今後友人集団の意思決定プロセスについてさらに理解を深めていく為に克服すべき課題であると考えている。友人集団の意思決定は非常に身近な現象ではあるものの、多くの研究が行われている家族や組織の購買意思決定に比べていまだに研究が少なく、引き続き多様な研究が必要である。